

まとめ

『古今集(九〇五)に「君をおきて」の歌が入集される約四〇年前に、多賀城付近一帯を大地震・津波が襲ったのであった。「日本三代実録」に「陸奥国」とあるから、必ずしも宮城県多賀城市付近というわけにはいかない。しかし「城下」を破壊し「城下」まで津波が襲来したと記されている。国府のある多賀城と見て間違いない。その近く、七ヶ浜町の海底に眠る「大根大明神」と思われる遺跡は、この大地震によって陥没したのだから。そして「末の松山」を波が越すと詠んだ平安初期の和歌は、そのときの情景を(記憶)しているのではない。島全体が陥没したという。半信半疑で海底調査を試みたところ、遺跡の発見に至った。そして、水深一〇一・五メートルの海底に遺跡があることをもとに、仙台湾・仙台平野の地形をふまえ、最新の科学的分析法でもってシミュレーションしてみたが、『三代実録』に記す地震・津波の状況と完全に合致した(注3の地誌参照)。やはり貞観二年の地震で島が陥没したと見てよいだろう。

概に用いると、どんな難問もすっきりと解けてしまう。だが、勝手に難問を作り出し、勝手に解明したと思っているだけではないのか。私は、それほど悪かではないと思っているが、貞観二年の地震と遺跡と和歌を、ゆらりとした糸で繋いでみたくなる。遊び心といってもよい。国文学の専門家はと思うだろうか。

注1 金沢現地「歌枕への理解」(おうふう、一九九五年一〇月)

注2 仙台湾のすぐ近く七ヶ浜町桑浜の深川沼は細長い形をしており、河口の痕跡とある。また、深川沼の北方約一〇メートルもないところに薬師堂があり、大河によって消された岩壁に洞穴を掘って薬師を祀る。これも大河・河口の痕跡である。

注3 筆者が研究メンバーに加わった論文のうち、日本語で報告したものをあげる。外国誌および英文で報告した論文は省略。
 ①「数値解析による貞観津波の研究」(東北学院大学研究報告)第三卷第一号、一九九九年九月
 ②「仙台湾内説による貞観津波の数値解析」(同右)第三四卷第三号、二〇〇〇年二月
 ③「貞観津波と海底潜水調査」(東北地域災害科学研

歴史的記録をたどると、大規模な地震は千年に一度の割合で発生している。それを証明するのは、本稿では述べないが仙台湾沖合の地層を調査すると三つの異なる地層があることだ。その一つが貞観二年の地震によるものなのである。大地震が三宅島・秋田県内陸部・蔵王山地域の順序で発生していることも、すでに明らかにされている。

柳田国男に始まる民俗学では、伝説は史書に記されなかった直史を語り伝えている、と考えるのが常識であった。これは伝説をもちあわせており、鶴呑みにするわけにはいかない。だが、史書に記された地震の記録と海底にひっそりと眠る遺跡、そして『古今集』や『百人一首』の歌に詠まれた謎に満ちた不思議な自然現象、これらは何かしら必然の糸で結ばれているように思われる。強く主張するつもりはない。ましてや、文学作品を史実や海底遺跡で解釈したと何にならう。文学の文学たる所以を、それこそ地震ではないが破壊することにたかりかねない。

念のために述べておけば、地震の記録と海底遺跡は因果関係があると思われる。とはいえ、それを和歌の解釈に用いてよいとは思われない。次元の異なるものを証拠に用いてよいとは思われない。次元の異なるものを証

注一 第三六巻(二〇〇三年三月)

- ④ 『宮城県沖地震モデルによる貞観津波の解析』(同右)第三八巻(二〇〇二年三月)
- ⑤ 「正断層モデルによる貞観津波の解析」(東北学院大学研究報告)第三七巻第一号、二〇〇二年一〇月
- ① は村上私・河野・今村文彦、② は村上・河野・今村、③ は河野・村上・今村、④ は河野・高田晋、今村・眞浦、⑤ は高田・河野・今村、古生物学その他の専門家を含む研究報告である。
- 注4 この円筒状の石は何を示すのか、よくわからない。神社や路傍でよく見かける道祖神の御神体とも似ている。あるいは中世以降の遺物かとも思えるが、遺跡の砂岩に含まれる微生物の化石などの分析によっても、やはり平安期の遺跡であると考えられる。石に刻まれた文字などは発見されていないので、断言はまだ控えなければならぬが、今は平安初期の遺跡・遺物ということで考察を進めることにする。
- 注5 貞観二年五月二六日の地震は、『類聚国史』および『日本紀略』にも記載がある。後者は『類聚国史』よりものであり全文ではない。なお、三塚通五郎「多賀城六百年史」(宮城県教育会、一九三七年二月)に「貞観の大地震と天津波」という短い文章があり、史料に記された地震の状況を紹介している。